

ガレキのなかでその花は火のようにゆらめいていた　モーターみたいな音をたてて蠅がぶんぶんとうなっている　腐った果物のおいがした　遠くにたなびく煙　あれは乾いた真昼の風に舞う　タンポポの綿毛かもしれない　たくさんのふわふわしたちいさなプロペラ　あるいはキノコをぷしゅつと踏んで埃みたいに飛ぶ胞子　そのつぶつぶは綿毛よりずっとかすかでちいさい　潮騒がかすかに聴こえてくる　眼と耳は煙の道で迷っていた

それでも見る聴くそれともつぶやく 皺くちやの古い紙 それでも見る聴くそれともひ
つかく でも空はかけない動いているからかこうとすると動いてしまう みるみる変わる
みるみるうつろうひかりも雲も猛スピードで ふくらみさくれくつについては切れ 畢竟
それは動くものすべて畢竟この宇宙にあるものすべて 畢竟なんておかしい言い方 だか
ら畢竟かけないかきようがない火のようにゆらめくその花さえも 幾重にもかさなりあう
花びらの色は 赤い乱気流みたいな渦のかさなり 赤というよりむしろ紫がかつた薔薇色
かもしれない いや赤でもない紫でもない薔薇色でもない その色の名はなんとよぶのか
わからないから言いようがない それでも見る聴くそれともつぶやく 名もなき花の 名
もなき色につつまれ

それでも見る聴くそれともつぶやく 雨のふるまへの空気のおい土くさい道のおい
拾った小石のなめらかな手ざわり 草いきれ蝶のひらめきそれからあの稲びかり しばら
くして遠い雷鳴 やがて落ちる雨つぶの音 それらについて語るべきかいやむしろなんに
も言わないほうがいい なんにも言わずに黙っていいよう 見る聴くそして黙っているその
ほうがずっといい それでもこうしてつぶやいている黙っていいようとつぶやいている つ
ぶつぶは空気いっぱいそれとも宇宙いっぱいただよっているのか このわたしもまたつぶ
つぶでできていてそのつぶつぶのなかに無数のわたしがいるかもしれない 名もなき花に
祈るみたいにわたしはつぶやく つぶやきはかすかなつぶつぶ それでも見る聴くそれと
もつぶやく あるいはうたうたつてみるうたおうとする でも無理ああうたうのはやつ
ぱり無理たぶんうたうことはもうできない 叫ぶことならまだできるいざとなればたぶん
できるそうきつとできるにちがいない

あたりにはおもちやの残骸が散らばっていた　ぶつ壊れたゼンマイ仕掛けの鳥　割れた
ガラスの靴　泥だらけの人形の家　灰だらけの猫のぬいぐるみ　でもここはいいといど
こ？　草ぼうぼうの観客席　朽ちはてた半円形の舞台には水たまり　かつて劇場とよばれ
た場所だろうか　うたうものはもうだれもない聴こえてくるのは沈黙だけ　死者たちの
声なき叫びだけ　水たまりは鏡のようにくもり空をうつしていた　できごとはないなりに

もないいやたしかにあったなにかがおこった そうとも言えるそうとは言えない 灰色の老いたる海よ たぶんうたうことはもうできない 凍りついた炎のように叫ぶこの口はスミレ色の深い穴 おしりやらあそこやらからだじゅうのいろんな穴いろんなつぶつぶが叫びだす 花のような傷口はまだ濡れている 血のまぼろしに花は滲んで わたしは幼い子供みたいに泣いていた

皺しわの波が寄せては返すぐもった音のくりかえし 皺くちやの古い紙 それでも見る聴くひつかきつづける破けるまではまだかける できごとはないなんにもないやたしかにあったなにかがおこった そうとも言えるそうとは言えない つぶつぶの砂がみんな落ちればひっくりかえすくりかえし それでも見る聴くひつかきつづける 皺くちやの紙に色をかさねる 幼い子供の気まぐれないたずらがききたい ぐるぐるとらせんを描く色鉛筆やくれよんの線 偶然の絵具のしたたり撥ね散るしぶき 打楽器の響きめくるめくりズムのゆらぎ みるみる変わるみるみるうつろうひかりも雲も雨のにおいも つぶつぶも線も 火のようにゆらめくその花さえも

たまゆらの夢のゆらめき それでも見る聴くそれともつぶやく 名もなき花の名をよぶために 瞬間のしたたりには永遠がある網膜にうつる残像はうつろでも 真実は宿る泡のようにほかない偶然にこそ たまゆらの花は火と燃え煙はたなびく 蜜から灰へ 皺くちやの古い紙にわたしは名もなき花の名をしるした ぷろてうす それは皺しわの老いたる海の皺くちやの古い神 幼い子供の気まぐれないたずらがきみたいに獅子から豚 豚から蛇 蛇から木 木から火 火から水へと変身し それから最初の人間になった エジプトの王は砕けた水晶のひかりのなかで自瀆にふけり 永遠の下痢をする

月とキツツキ 鏡とひかがみのあいだで わたしは花の蜜を吸った 花粉をはこぶ昆虫や瑠璃色の鳥のように 蜜を吸う蜜を舐める蜜を味わう 蜜の味は甘くてほんのすこし苦い 接吻するわたしの口は烏賊の墨で汚れ歯も舌も唇も黒かった 眼のなかをうごめく蟻に我を忘れわたしはトカゲたちのしっぽを切った 切っても切っても生えてくる青いしっぽ 巻貝のなかに隠れる裸の女 青白い乳房にも蟻がむらがる 青ざめた月はそのすがたを隠した わたしは海星を裏返す 棘だらけの海胆を叩き割って貪り食い 夜空を横切る流星になる 惑星の楕円軌道の長半径の二乗に反比例して 流星はサイコロ遊びにうつつを抜かすのだ 蛇と海老はまるで似ていない ナマケモノの星座はゆつくりと動くわけではない 死んだ海亀の甲羅の船で海を渡る 紫のタバコの煙 歪んだフィードバックの響き すると証券取引所の男たちが身をくねらせていっせいに失禁する めまいのするトンボは蜜蜂や蜂鳥より愚かとはかぎらない という教訓の意味はわたしにもまるでわからない ああ麗しき新世界 瀕死の踊り子が満面の笑みで踊りながら息を引き取り 失業した潜水夫たちの楽団が古いジャズを優雅に奏でる わたしは氷砂糖で孤独な灯台をつくった